

身体的虐待を受けた子どものプレイセラピーにおけるセラピストの体験に関する研究

——治療的アプローチの志向性との関連において

松 本 真 理 子

要 旨

臨床心理士を対象に調査を行い、身体的被虐待児のプレイセラピーの特徴およびアプローチの方向性について実証的に検討した。身体的虐待を受けた子どものプレイセラピーでは、遊びが豹変し、攻撃性の高さ、心的外傷後に特有の遊びがみられた。治療構造が乱れやすく、セラピストには怒りや無力感といった陰性感情、被圧倒感や保護感情が起りやすかった。治療者の経験年数やオリエンテーションによる違いは見られなかった。

「問題志向型アプローチ」では経験年数に関わらず治療構造が乱れやすく、力のせめぎあいが起りやすかったが、「非問題志向」型の経験年数の長い治療者には力のせめぎあいは起りにくかった。両アプローチの着目点の違いについて論じた。

キーワード：身体的被虐待児、プレイセラピー、セラピストの体験

I 問題と目的

1970年代以降、児童虐待の問題が社会的に取り上げられるにともない、心理臨床の分野において虐待を受けた子どもの治療的取り組みについて研究がなされている。なかでも、遊びを手段とするプレイセラピー（遊戯療法）は、遊びを通じて子どもの自然治癒力を引き出す心理療法であると同時に、子どものトラウマ治療にも有効とされている（Gil, 2006）。

虐待を受けた子どものプレイセラピーの様相には共通する特徴が指摘されている。康(1997)は、プレイセラピーの過程を通して「セラピストを限界まで追いつめる本児のプレイ」と、セラピスト側に引き起こされる怒りや辟易といった陰性の逆転移反応を具体的に考察している。山本ら(1996)は、病院でのプレイセラピーを通して、子どもの攻撃性や無差別的愛着傾向、人間関

係の不連続性などの情緒的・行動上の特徴を指摘し、パペット・プレイを導入するなどの対応を具体的に示して、トラウマに対するアプローチの重要性を述べている。藤田（1996, 1998）は、中学生の被虐待児との言語面接と箱庭における象徴表現の過程とセラピスト側に起こる「救い出したい」などの感情体験を考察している。仁木（1997）は、虐待を受けた女兒とのプレイセラピー過程とそこで展開した家づくりなどの象徴的表現やイメージを考察し、虐待を受けた子どもが「身体的・心理的に負わざるを得ないダメージは決して容易には計り知れず、それゆえ心理療法的な接近の重要性と難しさがある」と指摘している。

虐待を受けた子どもがこのような行動をとる要因には、①愛着形成の困難 ②①に起因する対人関係スキルの未熟さ ③虐待行為そのものから引き起こされる解離やフラッシュバックなどの症状 ④衝動性や怒りなどの抑制の困難さ ⑤暴力による解決をモデリングしたことによるものが挙げられるが、心理療法として何に最も着目して進めていくのかについていくつかの立場がある。子ども中心プレイセラピーやユング派の分析的プレイセラピーといった、既存のオリエンテーションに基づくもの（Schaefer, 2003）、また、トラウマ（外傷体験）に焦点を当てたポストトラウマティックプレイセラピー（西澤, 1998）、特定の理論にこだわらず治療過程に合わせて様々な手法を取り入れる統合的なアプローチ（Gil, 2006）などが報告されている。

ポストトラウマティックプレイセラピーは、虐待をトラウマの観点から捉え、トラウマが癒えていくプロセスとして再体験、解放、再統合の3つを想定する。重要なポイントとして、トラウマ・対人関係・攻撃性へのアプローチを挙げている。特にトラウマからの回復においては、虐待エピソードの反復的再現性を主な特徴とする「心的外傷後プレイ」が重視されている。具体的対応では、認知行動療法が応用され、クライエントの状態とプレイの局面に応じて、セラピスト側からの介入や言語的な働きかけを行い、クライエントに自らの認知や感情を言語的に表現させることが強調されている。

このように、被虐待児のセラピー場面では、遊びの傾向や展開される内的世界、対人関係の困難さと攻撃性、それによって引き起こされるセラピストのさまざまな感情体験に高い関心が持たれ、アプローチの方向性について模索がなされている。その中で、被虐待児のプレイセラピーの特徴やセラピストの体験を実証的に取り上げた研究は少ない。

そこで本研究では、虐待を受けた子どものプレイセラピーを行ったことのある臨床心理士に調査を行い、プレイ場面での体験を問うことで被虐待児のプレイセラピーの特徴および経験年数やアプローチによる違いを検討する。

II. 方法

1. 方法の検討

セラピー場面におけるセラピスト（以下、Th と略記）の体験を実証的に検討したわが国の研究には、皆藤（1987）と遠藤（1993, 1998）のものがある。皆藤（1987）は経験のある治療者の態度・感情に関する質問紙調査を行い、境界例患者の心理療法における治療者の体験を分裂病・神経症患者との比較で検討した。遠藤（1993, 1998）は質問紙調査や半構造化面接を行った一連の研究で、治療者に生じる陰性感情を言語的応答との関連で検討している。本研究ではこれらの研究の手法を参考にプレイセラピー場面における Th の体験について質問紙を通して調査を行った。

2. 質問項目の作成

質問項目を可能な限り現実のプレイ場面に即したものにするために、虐待を受けた子どものプレイセラピーを報告した事例および研究から、Th の体験に該当する記述・表現を 141 個抽出した（南方, 1999）。ほぼ同表現のものは筆者が削除し、これに方針に対する筆者の問題意識から得られた数個の表現を加え、一項目ずつカードにした。これらのカードを使って 5 名のプレイセラピー経験者に KJ 法によって分類してもらい、最終的に 46 項目とした。これらのプレイセラピストは、4 年以上のプレイセラピー経験者であった。さらに、以上のメンバーとは異なる 8 名のプレイセラピー経験者に参加してもらい、質問項目として不適切な項目や表現を改め、表現の具体性・抽象性を均質にするなどの作業を行った。

この 46 項目の内容は、「Th が捉えたプレイのテーマや内容に関するもの」（以下、プレイのテーマと略記）、「Th がどう感じたかという内的体験に関するもの」（以下、Th の内的体験と略記）、「Th がどう反応し、もしくはかかわったか、という対応に関するもの」（以下、Th の対応と略記）、「Th がどのような方針をとったか」（以下、Th の方針と略記）、「面接構造に関するもの」（以下、構造の乱れと略記）の 5 つで構成された。なお、本調査で使われた質問紙では、4 項目のダミー項目を加え合計 50 項目とし、各項目は内容を考慮してランダムに配置された。

3. 調査の手続き

1) 被調査者の選定

以前に A 学会や A 学会誌で児童虐待や子どものプレイセラピーについて発表した臨床家、情緒障害児短期治療施設・養護施設・児童相談所・子ども病院などの公的機関および B 市近郊の虐待防止ネットワークの心理職、C 大学出身の心理職など、虐待を受けた子どもとかかわる可能性が

高いと思われる臨床家をリストアップし、360名を被調査者とした。

2) 調査の実施

被調査者360名に質問紙とフェースシートを郵送した。フェースシートに関してはクライアント（以下、C1と略記）に関する秘密保持の判断やプライバシーを考慮して自由回答とした。その質問項目は、プレイセラピーの経験年数、身体的虐待を受けた子どもの経験事例数などであった。調査用紙には、被験者に身体的虐待の定義¹⁾を提示した上で、もっとも最近に終了した「身体的虐待を受けた子どものケース」²⁾と「虐待以外の主訴・問題で来談した子どものケース」を想起してもらい、46項目それぞれについて回答を求めた³⁾。回答方法は、頻度の四件法とし、「よくあった」を4点、「時々あった」を3点、「あまりなかった」を2点、「まったくなかった」を1点として得点化した。なお、質問項目に答える順序にはカウンターバランスをとって「身体的虐待を受けたケース」「虐待以外の主訴・問題で来談した子どものケース」と、その逆のものを半数ずつ被調査者に配布した。回答期間は約一カ月とした。回収率は19.4%、有効回答率は13.3%、有効回答者数は48名であった。

Ⅲ. 結果

1. 質問項目の分析

1) プレイのテーマ

プレイのテーマについての15項目について因子分析を行い、プロマックス回転後、解釈容易な3因子解を採用した（表1）。因子負荷量が、.40未満の項目が4項目あった為、これらの項目を除く残りの11項目を分析の対象とした。抽出された第1因子を「攻撃性と試しの行動に関する因子」、第2因子を「心的外傷後プレイと自己評価の低さに関する因子」、第3因子を「解離と対人関係の不安定さに関する因子」と命名した。そして、因子ごとの合計得点をそれぞれ攻撃性因子得点、PTプレイ因子得点、豹変性因子得点とした。

2) Thの内的体験

Thの内的体験についての17項目について因子分析を行い、プロマックス回転後、解釈容易な3因子解を採用した（表2）。因子負荷量が、.40未満の項目が3項目あった為、これらの項目を除く残りの14項目を分析の対象とした。抽出された第1因子を「陰性感情に関する因子」、第2因子を「被圧倒感に関する因子」、第3因子を「保護感情に関する因子」と命名した。そして因子ごとの合計得点を陰性感情因子得点、被圧倒感因子得点、保護感情因子得点とした。

3) Thの対応

Thの対応についての8項目について因子分析を行い、プロマックス回転後、解釈容易な3因子解を採用した（表3）。抽出された第1因子を「力のせめぎあいに関する因子」、第2因子を

「言語化の促しに関する因子」、第3因子を「存在し続けることに関する因子」と命名した。因子ごとの合計得点を、せめぎあい因子得点、言語化促進因子、being 因子得点とした。なお、Thの方針についての質問項目は表4に、面接構造についての質問項目は表5に示す。

2. 統制児群と被虐待児群におけるセラピストの体験の比較

因子ごとに対応のある平均値の差の検定を行った結果を表6に示す。攻撃性因子 ($t = -6.758$, $df = 47$, $p < .01$), PT プレイ 因子 ($t = -3.890$, $df = 47$, $p < .01$), 豹変性因子 ($t = -6.287$, $df = 47$, $p < .01$), 陰性感情因子 ($t = -6.451$, $df = 47$, $p < .01$), 被圧倒感因子 ($t = -7.803$, $df = 47$, $p < .01$), 保護感情因子 ($t = -3.289$, $df = 47$, $p < .01$), せめぎあい因子 ($t = -6.004$, $df = 47$, $p < .01$), 面接構造の乱れ ($t = -5.490$, $df = 47$, $p < .01$) は、1%水準で、being 因子 ($t = -2.193$, $df = 47$, $p < .05$) は5%水準で有意差が見られた。

3. Thの方針とプレイセラピーの経験年数の影響

被虐待児群におけるセラピストの体験の各因子について、Thの方針（それぞれ問題志向・非問題志向と命名）と経験年数（10年未満・10年以上）の2要因2水準の分散分析を行なった結果を表7に示す。言語化促進因子と構造の乱れにおいて、Thの方針の主効果が1%水準で認められた。また、豹変性因子とbeing 因子において、Thの方針の主効果が5%水準で認められた。さらに、せめぎあい因子においてThの方針と経験年数の交互作用が1%水準で認められた。そこで、下位検定を行なった結果、非問題志向のセラピストにおける経験年数の単純主効果と10年以上のセラピストにおける方針の単純主効果が1%水準で認められた。なお、経験年数が不明なデータが1名あった為、47名のデータを分析対象とした。

4. プレイのテーマ・面接構造・Thの内的体験・Thの対応の関係

被虐待児群におけるセラピストの体験について、因子間相関行列（表8参照）と被虐待児のプレイセラピーに関する先行研究から、プレイのテーマ・面接構造・Thの内的体験・Thの対応の関係について因果モデルを構成した。これらのモデルについて共分散構造分析を行ない、モデルの修正を行なった結果を図1に示す（豊田ら、1992）。

モデル全体の適合性は、攻撃性モデルでは $GFI = .914$, $AGFI = .815$, $RMSEA = .088$, $AIC = 47.713$ であった。PT プレイモデルでは $GFI = .943$, $AGFI = .851$, $RMSEA = .045$, $AIC = 34.753$ であった。豹変性モデルでは $GFI = .939$, $AGFI = .840$, $RMSEA = .067$, $AIC = 35.670$ であった。また、モデル細部について検討するために、係数について t 検定を行った結果、豹変性モデルの d5 から被圧倒感への係数以外は、いずれも5%水準で有意差がみとめられた。

表1 プレイのテーマについての質問項目

	第1因子	第2因子	第3因子
11. タイムアップなどのThの限界設定に対し、C1は怒りや攻撃性などで反応してきた	.766	-.147	-.174
7. C1はどこまで自分が許容されるのか、Thを試すような行動をしかけてきた	.655	.030	.024
1. つい今まで楽しく遊んでいたのに、ちょっとしたことをきっかけにC1が今までの態度を極端に一変させたことがあった	.549	.157	.371
22. Thの指示や促し、誘いかげに対し、C1は無視をしたり拒否で反応した	.546	.344	-.013
8. おもちゃを投げたり壊したり、遊具に対する攻撃的行動が観察された	.477	-.104	.269
36. C1はセッションの間じゅうほとんど単調な動作・遊びを繰り返した	-.213	.669	-.182
18. C1が「子どもは悪い」「自分は悪い子」という表現をしたことがあった	.044	.587	.033
40. ある遊びが、C1にとって、あたかも強制されたかのような喜びのないものとThの目に映ったことがあった	.021	.562	.078
44. C1は遊びにはほとんどのがつてこず、遊びにのらないというかたちで受動的な抵抗を示しているように感じられた	.077	.413	-.027
26. プレイのある時点でC1の行動がそのままの状態ではばくらの間止まってしまい、そのことをC1は覚えていないように思われたことがあった	-.398	.268	.779
20. C1が激しい攻撃と愛着とを交互に表現したことがあった	.062	-.315	.770
2. 一つの遊びが持続せず、次々と別の遊びに移り、散漫な印象を受けた	.361	.330	-.172
9. C1は蹴る、つねる、かみつくなどの身体的攻撃をThに向けてきた	.343	-.044	.392
16. プレイ中にあるテーマが繰り返され、儀式化している印象を受けた	.351	.015	-.116
42. Thの行動にC1が過敏に反応したことがあった	.385	.325	.229
固有値	4.182	2.342	1.362
寄与率	27.882	15.610	9.081

表2 Thの内的体験についての質問項目

	第1因子	第2因子	第3因子
14. C1に対して怒りが湧いてきたことがあった	.892	-.094	-.135
13. C1の要求の執拗さに困ったり、知らず知らずのうちにいらいらしていたことがあった	.876	-.094	.043
39. C1に会いたくない気持ちになったことがあった	.715	-.077	.040
34. 治療者としての有能感や自信が揺らいだことがあった	.693	-.144	.101
24. Thとして、無力感を感じたことがあった	.627	-.003	-.119
30. Thに対する攻撃が繰り返され、辟易したことがあった	.580	.303	-.066
17. C1とのセッションのあと、疲労困憊したことがあった	.542	.366	-.200
6. C1の要求を受け入れたい気持ちと制限とのはざままで揺さぶられたことがあった	.542	.105	.295
43. プレイの中で展開される状況の重さ、壮絶さに圧倒されたことがあった	-.108	.935	-.034
46. C1の残酷な遊びにThは苦しい気持ちになったことがあった	-.130	.676	.159
28. プレイ中にThの内部に悲しみの感情が湧いてくることがあった	-.031	.529	-.014
12. C1が内的世界を存分に表現しはじめると、Thは困惑させられたり、受けとめきれないように感じるがあった	.118	.416	.141
41. C1を守ってやらねばという強い感情が湧いてきたことがあった	-.013	.019	.912
15. 自分がC1のことをいざばん理解しているという気持ちが起こったことがあった	-.117	.039	.640
10. C1の背景や問題に触れたくない気持ちや触れることに対するためらいを感じるがあった	.193	.189	.221
19. C1がこれほどまでに自分のことを求めているのだから、できるかぎり子どもの要求に応じよう、と考えたことがあった	.208	.108	.361
37. C1の問題(主訴)には当人の言動にも何らかの原因があるにちがいない、と感じたことがあった	.366	-.295	.137
固有値	5.203	2.248	1.907
寄与率	30.608	13.226	11.215

表3 Thの対応についての質問項目

	第1因子	第2因子	第3因子
32. C1の制限破りとそれに対するThの対応が、力のせめぎあいのような関係になったことがあった	.907	-.105	-.165
35. プレイ中のTh自身の安全性に対し、ふだん以上の工夫や配慮を行った	.696	.066	.150
27. Thの働きかけにC1の反応がなくても、根気強く働きかけを続けた	.597	.007	.260
31. C1に対してThが思わず自分の感情をぶつけたことがあり、その結果、関係が深まったり、新しい関係が生まれたことがあった	.582	-.122	-.118
48. C1に対し、怒りなどネガティブな感情を表現してもいいと言葉で伝えた	-.153	.894	.133
25. C1の不安などの感情を明確化するような言語的なかかわりをした	.012	.874	-.249
33. C1がテーマを展開するまで、とくに働きかけはせずに根気強く待った	-.165	-.350	.787
23. 遊びが展開しなくても、ただ毎回ThがC1とそこに居続けることが重要と考え、実行した	.172	.278	.764
固有値	2.294	1.764	1.189
寄与率	28.681	22.050	14.863

表4 Thの方針

問題志向的アプローチ	
3. Thがプレイ中の状況を構成し、問題解決にとって有用だと考えられる方向に子どもをリードした	
45. C1の持つ課題やテーマに対し、Thのほうから適切な指示や刺激を与えた	
非問題志向的アプローチ	
4. 指示や刺激を与えてC1をリードしないことを基本方針とした	
29. C1が自分なりのペースでプロセスを展開することができることに信頼感をもって、Thからの積極的なアプローチは控えた	

表5 面接構造についての質問項目

38. 構造・限界・ルール・制限をはっきりC1に提示する必要性を感じた
47. 治療構造が混乱しやすかった

表6 両群におけるセラピストの体験の比較

	統制群(n=48)	被虐待群(n=48)	
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	
攻撃性	9.73 (3.43)	14.50 (3.22)	**
PTプレイ	7.48 (2.29)	9.06 (2.35)	**
豹変性	3.00 (1.15)	4.31 (1.36)	**
陰性感情	16.21 (5.03)	22.56 (4.95)	**
被圧倒感	7.23 (2.16)	10.67 (2.33)	**
保護感情	4.54 (1.32)	5.19 (1.30)	**
せめぎあい	6.92 (2.20)	9.50 (2.49)	**
言語化促進	5.00 (1.44)	5.29 (1.47)	n.s.
being	5.38 (1.44)	5.81 (1.41)	*
構造の乱れ	4.08 (1.54)	5.63 (1.51)	**

** p<.01 *p<.05

表7 Thの方針とプレイセラピー経験年数の影響

方針 経験年数 人数	非問題志向		問題志向	
	10年未満 (n=11)	10年以上 (n=14)	10年未満 (n=13)	10年以上 (n=9)
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)
攻撃性	14.73 (3.20)	13.14 (3.68)	15.08 (2.33)	15.11 (3.48)
PTプレイ	9.55 (2.38)	7.64 (2.50)	9.92 (1.61)	9.56 (2.40)
豹変性	3.55 (0.82)	4.12 (1.37)	4.69 (1.60)	4.89 (1.27)
Thの方針の主効果*: 非問題志向<問題志向 (F(1,43)=5.45, p<.05)				
陰性感情	24.09 (4.70)	19.57 (5.42)	23.31 (4.05)	24.33 (4.56)
被圧倒感	10.55 (1.69)	10.29 (2.81)	10.92 (2.56)	10.89 (2.20)
保護感情	5.27 (1.42)	4.92 (1.38)	5.54 (0.88)	5.11 (1.62)
せめぎあい	11.00 (2.19)	7.57 (2.06)	9.31 (2.25)	10.78 (2.05)
<div style="display: flex; justify-content: space-around; width: 100%;"> </div>				
Thの方針×経験年数の交互作用**: (F(1,43)=14.89, p<.01)				
非問題志向のThにおける経験年数の単純主効果**: (F(1,43)=13.11, p<.01)				
10年以上のThにおける方針の単純主効果**: (F(1,43)=11.40, p<.01)				
言語化促進	4.45 (1.51)	4.86 (1.35)	6.00 (1.53)	5.89 (0.93)
Thの方針の主効果**: 非問題志向<問題志向 (F(1,43)=10.02, p<.01)				
being	6.91 (0.70)	5.71 (1.38)	5.15 (1.57)	5.44 (1.24)
Thの方針の主効果*: 非問題志向>問題志向 (F(1,43)=7.02, p<.05)				
構造の乱れ	5.55 (1.44)	4.57 (1.65)	6.08 (0.95)	6.67 (1.22)
Thの方針の主効果**: 非問題志向<問題志向 (F(1,43)=10.71, p<.01)				

** p<.01 *p<.05

表8 因子間の相関行列

	攻撃性	PTプレイ	豹変性	陰性感情	被圧倒感	保護感情	せめぎあい	言語化	being
PTプレイ	.058								
豹変性	.393**	.020							
陰性感情	.764**	.085	.376**						
被圧倒感	.406**	-.062	.573**	.299					
保護感情	.166	.240	.147	.119	.176				
せめぎあい	.603**	-.020	.211	.722**	.169	.115			
言語化	.031	.370**	.295	.088	.221	.227	-.023		
being	.223	.139	-.192	.229	-.058	.133	.294	.027	
構造の乱れ	.639**	.163	.401**	.709**	.157	.210	.650**	.127	.056

**p<.01

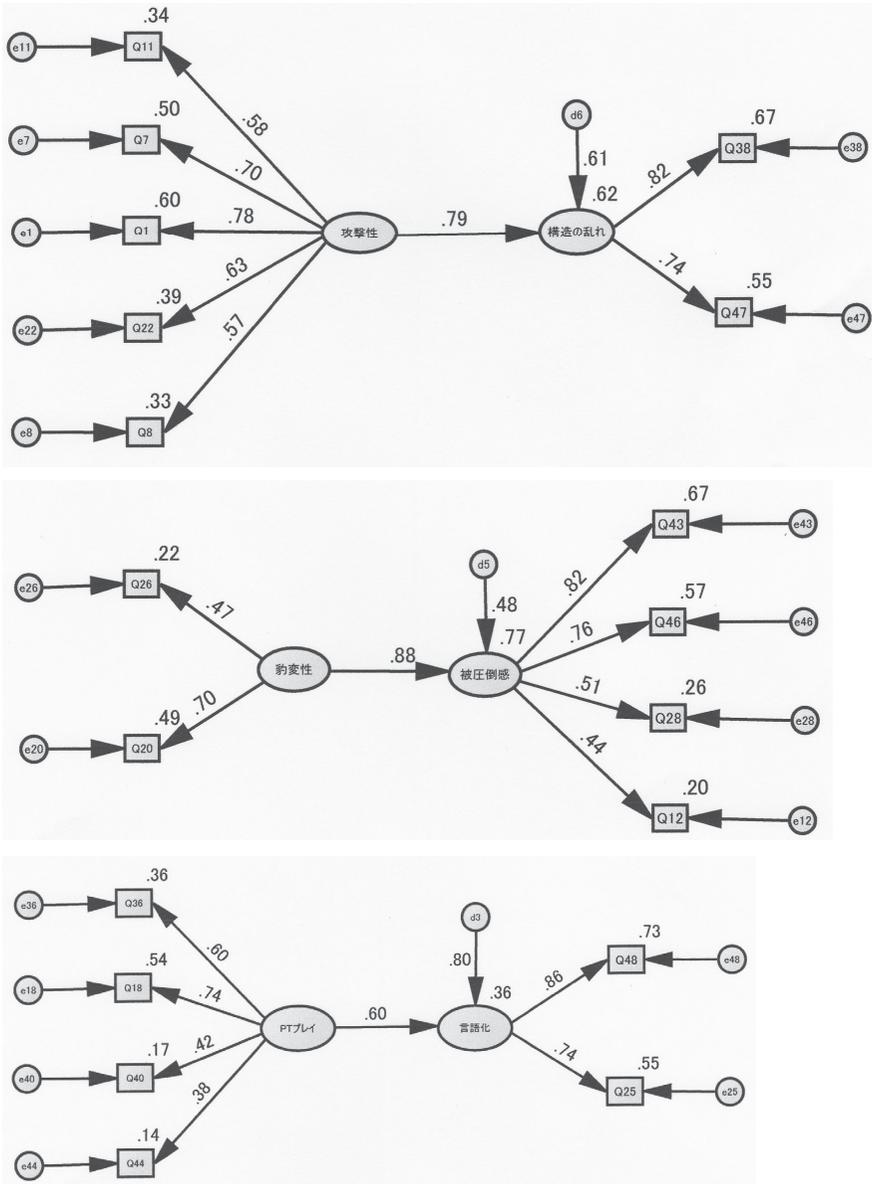


図1 プレイのテーマ・面接構造・Thの内的体験・Thの対応の関係

IV. 考察

1. 統制児群と被虐待児群におけるセラピストの体験の比較

全体を概観すると、言語化促進以外のすべての因子において有意差が認められた。すなわち、身体的虐待を受けた子どものプレイセラピーにおいては、遊びがころころ変わり、攻撃性の高さ

がみられる。また、外傷体験の再現を始めとする心的外傷後に特有の遊びがみられる。治療構造が乱れやすく、Thには怒り、辟易、無力感といった陰性の感情が引き起こされやすいほか、圧倒されるような気持ちや保護感情が起こる。被虐待児のプレイセラピーに関する従来の研究報告をほぼ裏付ける結果となった。

2. Thの方針とプレイセラピーの経験年数の影響

Thの内的体験については、Thの方針、経験年数に関係なく、陰性感情や被圧倒感、そして保護感情が生じていることがわかった。身体的虐待を受けた子どものプレイセラピーでは、オリエンテーション、経験年数に関わらず、治療者の内的体験は変わることがないことが示された。虐待を受けた子どもの内的世界の表現の壮絶さを反映しているといえる。

しかしながら、問題志向のセラピストは、非問題志向のセラピストにくらべて、「CIの解離や対人関係の不安定さ」と「面接構造の乱れ」を認知する頻度が高いことがわかった。問題志向のセラピストは、被虐待児としての特徴に焦点を当てて関わる為、CIの解離症状や激しい攻撃と甘えを交互に表現するといった子どもの行動を認知する傾向が強くなったと考えられる。また、面接構造が混乱しやすかったと認知する頻度も多いため、構造・限界・ルール・制限をはっきりとCIに提示する必要性を感じ、実際にThの方から適切な指示や刺激を与えたという一連の流れが推測される。CIの解離症状に対しては、プレイセラピーの展開を求めて問題志向的アプローチをとった可能性も考えられる。

また、「言語化の促し」や「存在し続ける」というThの対応では、Thの方針で違いが見られたのは当然のことであるが、クライアントと「せめぎあい」の関係が生じるという点で、Thの方針と経験年数の交互作用が見られたことは興味深い。問題志向のセラピストは、経験年数に変わりにくく、「せめぎあい」の関係が生じるが、非問題志向のセラピストは、経験年数が長くなると「せめぎあい」が減少する傾向が認められた。問題志向の治療においては、Thによる場のコントロールが重視され、結果としてせめぎ合いが生じやすいが、非指示的・受容的な治療においては、関係性そのものがクライアントの壮絶な内的世界を受け止める「器」となっている可能性が考えられる。

3. プレイのテーマ・面接構造・Thの内的体験・Thの対応の関係

本研究では問題志向と非問題志向の2群で共分散構造分析を行うにはデータ数が少ないため、2群まとめて分析を行った。実際のプレイセラピーでは折衷主義的な方針が採られることも多くあるため、探索的なデータ分析として問題は少ないと考えた。結果より、身体的虐待を受けた子どもは、プレイセラピーの中で激しい攻撃と甘えを交互に示し、試しの行動をとるため面接構造が乱れてくる。さらに、CIの解離症状と対人関係の不安定さによりThは圧倒されるというプ

ロセスは身体的虐待を受けた子どものプレイセラピーにおいて多く経験され、かなりのコミットメントがThには求められる(南方, 2001)。そのため、スーパービジョンやケースカンファレンス、職員との協力体制といったThを支える環境も、治療過程に大きな影響を与えると考えられる(浅井, 2002)。

一方、心的外傷後プレイについては言語化を促していくことによりアプローチしようとしているThの姿が浮かび上がった。山本・西澤(2001)は、虐待体験の再現や見捨てられ不安などのテーマを入院病棟内とプレイセラピーにおいて扱い、安心できる環境への導入、トラウマによる心的外傷体験からの回復、感情表現の促進、他者への信頼感の取り戻しなどを意図して子どもと関わっている。坪井(2004)は、児童養護施設におけるプレイセラピーにおいて、ネグレクト状況の再現を治療的に活用することが、体験を能動的にやり直すというクライアントの「育ち直し」に有効であり、ネグレクトからの回復につながると述べている。さらに檜原(2012)も、このように子どもをリードしていく側面が不可欠であると述べている。

4. まとめ

身体的虐待を受けた子どもは2重の意味で受傷している。一つは、最も信頼する(せざるを得ない)保護者から有形無形の暴力を向けられ、その時点において外傷を受けるということ(=心的外傷体験)、もう一つは、信頼する大人と持続的かつ安定した愛着を形成することができず、外的世界への基本的信頼や自身が存在するための実存的基盤そのものを傷つけられるという点(=愛着の障害)においてである。本稿で設定した「問題志向」型の治療的アプローチは、プレイセラピーにおいてトラウマをより積極的に焦点化しており、前者に力点が置かれているのではないかと考える。損なわれた愛着形成についても注意が払われているが、歪まざるを得なかった認知の修正や感情表現の促進など、再教育の要素が強いのではないかと考えられる。他方、「非問題志向」型の治療者は、受容的であり指示をせず、遊びが自発的・内発的に展開されることに信頼を置き待とうとする(Landreth&Sweeney, 2003)。何が自身の内でもっとも癒されるべきかは子ども自身が知っており(Landreth&Sweeney, 1997)、自己指示的(self-directing)である。仮に子どもがトラウマを表現することはあっても、それをどのように扱うかはその都度子どもと協同探索者であるセラピスト(Landreth&Sweeney, 2003)が創造的に発見するものと考えている。「非問題志向」型の治療者は、子どもとの間に安定した関係を再構築し、その関係性において遊びをともに体験し受容するプロセスに最も大きな治療的要素を見出しているのではないかと考えられる。

もっとも、今回の調査では両者の方針を測定する項目はそれぞれ2項目ずつしかなく、基本的なスタンスは知ることができても、実際個々の治療者がどのように捉えていたかを測定するには不十分である。

プレイセラピーについては、それぞれの職域において多くの事例研究がなされ、有益な知見（安島，2000；伊藤，2017）が積み上げられてきたが、2000年に入り、各流派によるプレイセラピーにおけるアプローチがようやく比較検討されるようになった（Schaefer，2003；吉田，2010）。諸アプローチの横断的な効果研究は始まったばかり（Schaefer，2003）であり、本研究はプレイセラピーの実証研究として寄与するものである。今後、それぞれの心理療法がプレイセラピーという場をどのように捉えどのような効果を見出していくか、職域との関連も含め注視していきたい。

〈注〉

- 1) 親または親に代わる養育者により加えられた身体的暴行の結果、児童に損傷が生じた状態で、①非偶発的であること、②反復・継続的であること、③単なるしつけ・体罰の程度を越えていることの3つの要件を満たすもの。
- 2) 身体的虐待と同時にその他の虐待が生じているケース、虐待の事実が途中で判明したケースも含めた。
- 3) 双方のケースともに、クライアントと一対一でプレイセラピーを行ったものに限った。インタークのみ、アセスメントのみ、グループセラピーは含めなかった。

付記

本研究は、1999年甲南大学大学院人文科学研究科に提出した修士論文のデータを使用しています。修士論文作成に当たり御指導いただきました甲南大学の中井久夫名誉教授、京都大学の皆藤章教授、そして協力していただいた大学院生の皆さんに厚く御礼申し上げます。また、修士論文の一部は、日本心理臨床学会第19回大会において口頭発表させて頂きました。その際、座長をしていただいた西出隆紀先生には貴重な御指摘を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。最後になりましたが、日々の臨床で御忙しい中アンケートにご回答下さいました諸先生方に深く御礼申し上げます。

文献

- 安島智子（2000）. 遊戯療法を構成するもの. 日本遊戯療法研究会（編）. 遊戯療法の研究. 誠信書房.
- Axline, V. M. (1947) Play Therapy. Penguin Random House. 小林治夫訳（1972）岩崎学術出版
- 浅井靖久（2002）. 児童養護施設における心理療法活動. 高橋利一（編）. 児童養護施設のセラピスト—導入とその課題. 筒井書房.
- 遠藤裕乃（1993）. 言語的応答に表現された治療者の逆転移. 精神療法, 19（3）, 243-250.
- 遠藤裕乃（1998）. 心理療法における治療者の陰性感情と言語的応答の構造に関する研究. 心理臨床学研究, 16（4）, 313-321.
- 藤田美枝子（1996）. 被虐待児 Y 子心理療法過程. 日本心理臨床学会第15回発表論文集.
- 藤田美枝子（1998）. 施設入所中に児童相談所への通所治療を試みた被虐待児の一例. 心理臨床学研究, 16（1）, 70-81.
- Gil, E(2006).Helping abused and traumatized children.The Guilford publication 小川裕美子、湯野貴子（訳）（2013）虐待とトラウマを受けた子どもへの援助—統合的アプローチの実際

- 伊藤良子 (2017). 遊戯療法; 様々な領域の事例から学ぶ. ミネルヴァ書房.
- 皆藤章 (1987). 境界例患者—治療者関係における治療者の体験の検討. 心理臨床学研究, 4 (2), 7-17.
- 康智善 (1997). 母性剥奪と被虐待により著しい行動障害を示した3歳女兒の治療過程. 心理臨床学研究, 15 (2), 159-170.
- Landreth, G. L. (2002). *Play Therapy: The art of the relationship second edition*. Paterson Marsh Ltd. 山中康弘 (監訳) (2007) プレイセラピー—関係性の営み. 日本評論社.
- Landreth, G., & Sweeney, D. (1997). Child-centered group play therapy. In D. Sweeney & L. Homeyer (Eds.), *Handbook of group play therapy*. Jpssey-Bass.
- Landreth, G., & Sweeney, D. (2003). Child-Centered Play Therapy. In Schaefer, C. E. Eds. *Foundations of Play Therapy*. Hoboken, NJ: John Wiley & Son. 串崎真志・畑中千紘・羽野 (謝) 玲糸・野口寿一・佐々木麻子 (訳) (2011) 「子ども中心プレイセラピー」プレイセラピー 14の基本アプローチ. 創元社.
- 南方真理子 (1999). 身体的虐待を受けた子どものプレイセラピーにおけるセラピストの体験に関する研究. 甲南大学大学院人文科学研究科修士論文.
- 南方真理子 (2001). Kくんのプレイセラピー. 甲南大学臨床心理研究, 10, 7-21.
- 榎原真也 (2012). 児童養護施設における心理療法. 加藤尚子 (編). 施設心理士という仕事—児童養護施設と児童虐待への心理的アプローチ. ミネルヴァ書房.
- 日本遊戯療法学会 (2014) 遊びからみえる子どものこころ. 日本評論社
- 仁木智子 (1997). 虐待を受けた4歳女兒とのプレイセラピー過程. 甲南大学臨床心理研究, 6, 9-16.
- 西澤哲 (1994). 子どもの虐待. 誠信書房.
- 西澤哲 (1998). トラウマを受けた児童への治療的接近—ポスト・トラウマティック・プレイセラピーを中心に. 斎藤学 (編). 児童虐待—臨床編. 金剛出版.
- Shaefer, C. E. (2003). *Foundations of Play Therapy*. Hoboken, NJ: John Wiley & Son.
- 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫 (1992) 原因をさぐる統計学—共分散構造分析入門. 講談社.
- 坪井裕子 (2004). ネグレクトされた女兒とのプレイセラピー—ネグレクト状況の再現と育ち直し. 心理臨床学研究, 22 (1), 12-22.
- 山本悦代・中農浩子・西澤哲 (1996). 身体的虐待を受けたこどもの入院中の心理治療の検討. 日本心理臨床学会第15回発表論文集.
- 山本悦代・西澤哲 (2001). 身体的虐待を受けた4歳女兒への入院中の心理的援助—恐怖, 怒り, 絶望の世界. 心理臨床学研究, 18 (6), 581-592.
- 吉田弘道 (2010). 遊戯療法—二つのアプローチ. 福村出版
- West, J. (1992) *Child centered play therapy* (2nd edition). Edward Arnold Limited. 倉光修監訳 串崎真志・串崎幸代 (訳) (2010) こども中心プレイセラピー. 創元社